16. 術後顎間固定を施行した患者の看護の経験から

畑　了子，須見登志子，和気愛子
（附属病院看護部）

下顎前突症の審美障害を主訴とする24歳の女性に対して，下顎骨骨体切除術を施行した際，固定の安定をはかるため，インター・オクルーザル・スプリントを装着して顎間固定を行った症例の看護を経験した。

通例術後は，線福子または矯正用ブラケットを応用した顎間固定が行われるが，日常生活の面で，患者が大きな支障を感じる事は少ない。しかし，本症例の場合，インター・オクルーザル・スプリントが，上下歯列間の間隙を閉鎖するため，口腔前庭と固有口腔との交通が消失し，口腔清掃・食事摂取・会話の面で著しい困難をきたし，そのために患者が受ける精神的・身体的苦痛が，極めて大きい事がわかった。その看護の内容を紹介し，今後の方向を検討したので報告する。

口腔内の清潔保持は，術直後においては，創の安静を第一とし，吸引や飲水にとどめ，舌側面は舌で拭うように清掃した。創治癒後は，歯磨きとウォーター・ピックの併用で清掃効果を高め，爽快感と満足が得られた。

食事は，濃度の高いミキサー食の吸綴が困難なため，臼後三角部の利用を試みたが，効果は無く，食事の濃度を下げると栄養価の低下を招き空腹による飢餓感が増強した。

会話については，閉唇したままで話している状態であり，筆談やゼスチャー，口唇の読みとり法等，様々な方法を試みたが，患者のストレスをやわらげるには至らなかった。

そこで，インター・オクルーザル・スプリントに一箇所穴を開けてもらったところ，これ迄の苦痛が一挙に解決された。

今後は，患者の生活情報を提供する事で医師との連携を密にし，患者中心のより良い医療と看護を行うよう努力して行きたい。

質　問　　国分正廣（歯科麻酔）

顎間を固定してそれほど摂食に苦労するなら，胃チューブを入れて経管栄養にしないのですか。

回　答　　金澤正昭（口腔外科Ⅰ）

顎間固定患者で食事摂取にこれほど難渋したのは本例のみであり，本症では経管栄養をすすめたが，患者がこれを望まなかったため経口摂取を続行した。

17. 局所麻酔薬アレルギーに対する特異的検査（RAST）法の開発

国分正廣，新家　昇，遠藤祐一
大友文夫，小田和明*，町田　實*
（歯科麻酔，薬・薬品製造*）

一般に，薬剤に対するアレルギー反応がIgE抗体を介する即時型アレルギー反応であることを証明するには局所麻酔薬に対する特異的なIgE抗体の同定が必要である。この意味で，最も特異的なIgE抗体の検出法はRadio Allergo Sorbent Test（RAST）である。しかし，現在までのところ局所麻酔薬に対するRAST法は確立されていない。この理由としてRAST法に用いるディスクやプラスチックボールには理論上アミノ基をもったポリペプタイドや蛋白質しか結合し得ないからである。したがって，局所麻酔薬をそのままの構造で，しかも抗原性を失なわせずに蛋白質と結合させるとが難しいのである。そこで我々は，リドカインおよびプロカインのカルボン酸誘導体を合成し，RAST法に応用したので報告する。また，局所麻酔薬に防腐剤として添加され，しかもそのアレルギー性が問題視されているメチルパラベンについても同様にRAST法を応用した。

リドカインのカルボン酸誘導体は2.6—XylidineとN—Methylliminodiaceticacidから合成した。プロカインのカルボン酸誘導体はプロカインと無水コハク酸とから合成した。また，メチルパラベンはEthyl p-hydroxy O—benzol glycolateを加水分解してカルボン酸誘導体とした，こうして，カルボキシル基をもった局所麻酔薬をアミノ基をもつウシ血清アルブミンとcouplingさせ，臭化シアンで活性化したディスクへの吸着は極めて良好であった。このディスクに固定したところ，抗原のディスクに被検者の血清を加え，^{125}I—抗IgE抗体を加えて，正常者のRAST値を質出した。この結果，正常RAST値は，リドカインで944～2,716d.p.m，プロカインで